

# 霧ヶ峰の自然は今…?

## 「霧ヶ峰における自然環境の保全と再生に関する調査研究」



蝶々深山

平成14年2月に旧霧ヶ峰有料道路が無料化されました。これを契機として、「ピーナスライン沿線の保護と利用のあり方研究会」(会長:土田勝義、事務局:長野県環境自然保護課)が設置され、保護と利用について検討がなされてきました。平成16年3月にまとめられた提言では、「草地の森林化」、「湿地の乾燥化」、「踏み込みによる裸地化」、「外来種の拡大」などの問題が生じているとされています。研究所では、今後の霧ヶ峰の環境保全策を検討するため、県環境自然保護課や霧ヶ峰自然保護センターや地元の方々と協力をしながら、平成16～17年度にかけて霧ヶ峰の自然に関する総合調査を行っています。ここではプロジェクトの紹介とともに、調査結果の中から2つのトピックを紹介させていただきます。

### 【プロジェクトの概要】

#### (1) 調査の対象地域

霧ヶ峰高原の 湿原(八島ヶ原湿原、踊場湿原、車山湿原)、草原、樹叢を主な調査対象としています。

#### (2) 調査内容(現地調査と文献調査による)

森林化の調査、植物相(フロラ)調査、外来種調査、鳥類群集と植生構造や植生変化に関する調査、ニホンジカの分布と自然への影響に関する調査、レッドリスト掲載種など指標となる昆虫の生息調査、両生類・魚類等の生息調査、地形・地質に関する現地地表踏査、草原の管理方法の変遷などの聞き取り調査

(プロジェクトリーダー 大塚孝一)



植生調査の様子(2004年7月)

### 協働が創る自然保護の新しいかたち

霧ヶ峰は、現在、牧野組や財産区、森林管理署が入り組んで土地を所有しています。これは霧ヶ峰がかつて諏訪地方の農業用牛馬の飼料を確保するためなどの採草入会地であったことに起因しています。

今回の調査では、霧ヶ峰との深い関わりを持つ土地所有者の皆さんにご協力いただき、かつての利用状況やその歴史の聞き取り調査も行っています。霧ヶ峰での採草経験や積み重ねられてきた知恵にたいしては、尊敬の念を抱かずにいられないものばかりで、今の霧ヶ峰しか知らない自分にとっては、目から鱗が何枚も落ちたという感想です。かつては限られた資源を持続的に利用していくための「入会」という仕組みがあり、限られた人数だけに入会を許す「馬札、歩札」と呼ばれる鑑札の発行が行われ、「山の口」と呼ばれる採草期の始まり期日など細かく定められていました。入

会集落の住民はこうした厳しい掟を守って利用を行っていました。こうした秩序ある利用の結果、霧ヶ峰の草原は育まれてきたのです。

調査は環境保全研究所を中心に行われていますが、霧ヶ峰自然保護センター内に今年度から発足した霧ヶ峰パークボランティアにもご協力をいただいています。研究の成果と地域のマンパワーを活かし、霧ヶ峰の保全のために地域に根づいた支援をしていきたいと思っています。

また、美ヶ原でも今年度から「ピーナスライン沿線自然再生」として美ヶ原の在来植生再生が始まっており、多くの方々との協力により自然再生作業やモニタリング調査を行っています。こうした協働の和が広がることによって、ピーナスライン沿線の保護と利用は新しい一歩を踏み出すのではないかと考えています。(県環境自然保護課 宮坂正之)

## トピックス 1 草原の減少

日本にみられる草原の多くは、人の手により維持・管理された二次草原(半自然草原、野草地)もしくは人工草原(牧草地など)です。二次草原は、その維持・管理の取り組みが失われると、しだいに森林へと移り変わっていきます。日本の代表的な草原の一つである霧ヶ峰草原も、火入れや採草により維持されてきた二次草原ですが、昭和30年代半ば(1960年代)以降、そうした草原利用の変化や縮小にともない、草原に変化がみられるようになってきました。霧ヶ峰の八島ヶ原湿原周辺(2.2km×2.2km)について、昭和37年(1962年)と平成12年(2000年)に撮影された空中写真から、二次草原

(低木林を含む)の範囲を調べると、その面積は、294haから195haに減少(面積比33%の減少)していました(下図参照)。この二次草原面積の減少は、「樹叢(じゅそう)」と呼ばれる落葉広葉樹林の拡大のほか、人工草原化や植林(カラマツ、ドイツウヒ)などにより進行したものです。また、現在、広い範囲にわたって草原内に低木や高木の侵入が進んでおり、今後は、これら草原内の樹林の拡大により、さらに二次草原の面積が減少すると予想されます。

(植物生態担当 尾関雅章)

1962年



2000年



八島ヶ原湿原周辺の1962年と2000年の二次草原分布域(網掛部分)



## トピックス 2 霧ヶ峰におけるニホンジカの実態調査～ライトセンサス～

近年、長野県ではニホンジカが増加して問題になっています。農林業被害だけでなく、自然林での樹木の皮はぎや高山植物を食べるなど、自然への影響も心配されています。霧ヶ峰でもシカの数が増え、聞き取りによると、ここ15年ほどで草原に頻繁に出てくるようになったそうです。最近では、ニッコウキスゲを食べたり、湿原へ入り込むなどの影響が出始めているようです。

そこで、霧ヶ峰におけるシカの実態を把握するために、平成16年の秋から、ライトセンサスと呼ばれる調査を開始しました。これは、夜間に車をゆっくりと走らせながら両脇にサーチライトを照らし、光るシカの目を探して頭数を数えていく調査です。霧ヶ峰自然保護センターやパークボランティアの方々にご協力いただきながら、10月28日～12月1日の間に7日間の調査を行いました。また、八島ヶ原湿

原でも遊歩道からライトを照らして、湿原に入り込んでいたシカを調査しました。

その結果、1回の調査で12～32頭のシカを発見することができ、草原では16頭の群れが採食していることもありました。八島ヶ原湿原では、3～7頭の群れが入り込んでいたのも確認できました。今後、同じ調査を季節ごとに毎年行うことにより、季節変化や年変化を追跡していきたいと思っています。

(哺乳類生態担当 岸元良輔)



ニホンジカによる樹木の皮はぎ(撮影 大塚)